pic by DAVE ATLAS／RETNA／Orion Press

THE VINES

ステージを降りるときって、宇宙船に乗り込むような感じがする。すっかりぶっ飛んじゃってる、存在自体が消耗し切ってるっていうのかな。ヘヴィだよ

プリミティヴな衝動に突き動かされ、混沌とノイズの只中に躊躇なく飛び込み荒れ狂っていくクレイグ・ニコルズ。光速の生命とロックンロール・エクスプロージョン——ガレージ・ロック・ルネッサンスの風雲児、ヴァインズ!

©2002 BY ROLLING STONE LLC./ROB SHEFIELD/NANATSUSHIN TRANSLATED BY SATOMI KATAOKA

先月ニュージーランド、オークランドからスタートした「ビッグ・デイ・アウト03」でのヴァインズは荒れたらしい。へろへろのクレイグはまともに曲を歌い終えることができず、メンバーはそれを囲んで途方に暮れる――フェス参加者のライヴ・レヴューを拾い読みするかぎり、昨年12月のザ・ミュージックとのUSツアー中に生じたきしみは解消されていないようだ。／米人気TVショウのリハーサル中にクレイグがセットを破壊したため、出演はキャンセル。その2日後、ボストンでのライヴ中ささいなきっかけでクレイグがパトリックをマイクで殴ったことから取っ組み合いが始まり、観客も巻き込んでの騒ぎに。クレイグの極度の疲労と消耗にドクター・ストップがかかり、残るツアー日程を消化しないままバンドはオーストラリアへ帰国、飛行機嫌いで精神的にも体力的にも長時間の移動に耐えられないことを理由に、ビッグ・デイ・アウト後に控えていた初来日と英国でのショウはキャンセルされた。6都市を転戦するビッグ・デイ・アウトを終えると、彼らはオフに入る。／明らかにバンドは混乱している。それもそのはずだ。過去1年間でこれほど波乱に満ちたジェットコースター・ライドを味わったバンドはいないのだから。アルバム・デビュー前から「ニルヴァーナの再来」と称賛され、フロント・マンであるクレイグの奇行と常軌を逸したパフォーマンスは、エネルギッシュな音楽とあいまって彼を新たなロック・アイコンの座に押し上げた。イギリスでの人気沸騰がアメリカに飛び火し、豪州新人バンドとしては快挙のビルボード・アルバム・チャート上位にランク・イン。「ロックンロール・リヴァイヴァル組」の顔として一躍脚光を浴びた。／だが、周囲が熱狂し彼らを求める声が急激に高まるにつれ、噴火するロック・サウンドと透明なメロディというヴァインズの二面性が象徴する、クレイグの中にある矛盾も増幅した。その矛盾がクレイグ自身を引き裂き、バンドを引きずりまわす様を追ったのが、このテキストである。アーティストとしての自己顕示欲とロック・スター願望を抱えながら、ライヴもインタヴューも大嫌い。何かと言うと自分の殻に逃避・埋没してしまうひきこもりのプロブレム・チャイルドは、全てをシャットアウトすることで自らの夢想と音楽のピュアネスを保とうとする。昨年4月に初めてヴァインズを観た時もそうだった。ステージ上をゴロゴロ転がり、そのたびPAに衝突する。ギターをぶん回しながらスライディング（他のメンバーは明らかに迷惑そうだった）を決め、汗もよだれもお構いなしの口元に白痴めいた笑顔が浮かぶ。たとえ無人の会場だったとしても、彼はああいう演奏をしただろう。その眼には音楽以外映っていない。頭の中で鳴っている音楽と、〝GET FREE〟〝OUTTATHAWAY!〟と体を突き破って外に出ようとするエネルギー。その衝動のみに文字通り全てを委ねながら、ヴァインズは誰も乗りこなせない野性の馬のように激しく美しいロックを掴もうとしている。（坂本麻里子）

僕が作りたいのは、アルバム20枚なんだ。若くて元気のあるうちに作りたい――クレイグ

「何も壊してないよ」。ザ・ヴァインズのフロントマン、クレイグ・ニコルズは呟く。ロサンゼルスにあるロキシー・クラブのバック・ステージで、彼は昨夜の行動を思い出そうとしている。「覚えてるのは、とにかく一面ガラスだらけだったってことだけで。朝の6時頃、電子レンジでピザを作り始めたんだ。凄い腹が減ってて、しかも頭がもうろうとしまくっててさ。ラリってたんだよ。っていうか、ラリってはいなかったけど、でも食べてなかったのは確かで。ステージに上がるずっと前から、なんにも食べてなかった。それで腹が減ってたのと、あと一面ガラスだらけってのは覚えてて……」。彼の声が次第に小さくなり、青い瞳が暗く曇る。「あー……、ひょっとしたら何か壊したかもしんない」

たぶん壊したのだろう。

ザ・ヴァインズ初の長期にわたる全米ツアーが終わりに近づき、メンバーたちにも過労と緊張の跡が見える。彼らがロック・シーンの花形バンドになったこの短い期間に（具体的にはこの半年の間に、イギリスのマスコミによって〝ニルヴァーナ以来のベスト・バンド〟に選ばれ、ファースト・アルバムの『ハイリー・イヴォルヴド』が、ビルボードのアルバム・チャート初登場1位に輝いた）、クレイグはというと、風変わりな小男という評判を手に入れた。ショウ開始前に3時間にわたってトイレに閉じこもったとか、インタヴューで自殺について語ったとか、イギリスのテレビ番組出演中にベーシストにカンフー・キックを食らわせたといったことで、まず有名になってしまったのだ。24歳の今、クレイグは既に何百もの曲を書き溜めているという。ステージの上よりスタジオの中にいるほうが好きなタイプだが、この1ヶ月間はアメリカをツアーして過ごしてきた。お陰で彼の頭の中の混乱状態は、少しも解消されないままだ。

目下、この不思議なイカレ男は、楽屋のソファに腰をかけ、水パイプのマリファナと栄養ドリンクのレッド・ブルを交互に口にしながら、今夜のセット・リストを清書している。毎晩同じ曲を12曲前後演奏しているが、曲順は毎回違っている。「レッド・ブルって、何本飲むと飲み過ぎになんのかな？」と、彼は訊ねる。「2本飲んだんだけど。でもマリファナとはあんまり合わないね。もう1本飲むべきかなあ」

飲まないほうがいいだろう。

ショウ開始数分前になって、クレイグは幻覚によるパニックを起こし始める。立ち上がって「フリークアウトだ」と言いながら、行ったり来たりする様子でわかる。水パイプを手に持ったまま、彼はソファの隅に退却して縮こまる。ローディの1人が「出られるか？」と訊ねる。「わかんないよ」と答えるクレイグ。ヴァインズのほかのメンバーは、心配している様子はない。聞いたことのあるやり取りだからだ。それも何度も。ベーシストのパトリック・マシューズ、ドラマーのヘイミッシュ・ロッサー、そしてギタリストのライアン・グリフィスの3人は、ヴィクトリア・ビールを飲みながら、自分たちもクレイグのようにステージでシャツを引き裂くべきかどうか話し合う。「この太鼓っ腹を引っ込める手術でもしなきゃ、やれっこないね」。クレイグは相変わらず、頭を両手で抱えて座っている。

MCが「さあロックンロールの用意はいいか？」と観客に問いかける。クレイグは頭を上げ、「僕はまだだ」と唸るが、何はともあれ階段を下りていく。狂暴なまでに激しいショウが繰り広げられる。〝ゲット・フリー〟や〝エイント・ノー・ルーム〟といったニルヴァーナ張りの怒濤のナンバーでは、クレイグは取り憑かれたように絶叫する。毎回観客に好評の、アウトキャストのカヴァー、〝ミズ・ジャクソン〟では、彼はコーラスを何度も何度も繰り返す。最後の曲、〝ファック・ザ・ワールド〟で、クレイグはギターを叩き壊し、ドラム・セットの中に飛び込む。ギターの破片やドラムやシンバルが散乱する中で、彼は転げ回る。この日このとき初めて、楽しそうな表情を見せる。

一昨年オーストラリアで、インディ・シングル、〝ホット・レザー／サン・チャイルド〟でデビューしてからというもの、ザ・ヴァインズはトップに向かって急上昇してきた。ザ・ストロークス、ザ・ホワイト・ストライプス、それにザ・ハイヴスといったバンドと並んで、ザ・ヴァインズは、ここ数年で増長した、KORNのクローンのような陳腐なバンドを一掃してくれる、新しいモダン・ロック・サウンドのリーダー的存在として喝采を浴びてきた。実際にはこれらのバンドには共通点というのはあまりないのだが、世界中のロック・ファンが、パンク・ロック系の新しい興奮とアドレナリンに飢えていることを、彼らが証明しているため、みんな一括りにされているのである。突然、〝K〟の頭文字とバギー・ショーツ姿のエセDJは、イケていないとみなされ、逆に、ギターとレザー・ジャケット、そして語尾に黙音の〝e〟のつくバンド（VINES、WHITE STRIPES、HIVES、STROKES）が、イケているとみなされるようになった。ライアンは言う。「誰にもハイヴスと間違えられずに、USツアーをやり遂げられたのは、ほとんど奇跡だよね」

ヴァインズのサウンドには、ガレージ・パンクに通じるエネルギーが感じられるが、彼らの真のエネルギー源は、クレイグの壮大なイマジネーションにある。彼を際立たせているのはその野心、使命感だ。「僕たちにはできるって、いつも確信してたよ」と、クレイグは言う。「知恵を出し合えば、必ず凄いアルバムが作れるとわかってた。結局知恵は出し合わなかったけど、でもとにかく凄いアルバムができ上がったよ」

彼の望みは第2のカート・コバーンになることで、しかも今すぐなりたいと思っている。彼は、『ハイリー・イヴォルヴド』を二枚組にしたいと思っていた。実際、今すぐにでもスタジオに戻って、頭の中にある音楽をレコーディングしたくてウズウズしている。彼はまた、ビートルズやブライアン・ウィルソンはツアーに出なくてもよかったのに、何故自分はしなきゃならないのかと、よく愚痴をこぼしていることでも知られている（ビートルズとブライアン・ウィルソンがツアーをやめたのは、既に世界を制覇した後だったことなどお構いなしだ）。「僕らが作りたいのは……んと……僕の頭にあるのはアルバム20枚なんだ」と、クレイグ。「そう、20枚。大体そんな感じ。若くて元気のある間に作りたいんだ。だんだん元気もなくなってきてるからね」

一匹狼で、人付き合いがなくて一日中家で音楽を聴いてた。音楽が僕にとっての神秘の世界――クレイグ

ウェスト・ハリウッドの友人宅で午後の陽射しの中、レディオヘッドの〝ザ・ツーリスト〟をエピフォンのアコースティック・ギターで何度も何度も上の空で弾きながら、クレイグは愛想よくぺちゃくちゃお喋りをする。スワーヴドライヴァーのTシャツを着てくつろぐ彼の髪は、まるで主が避難した後のネズミの巣のように、ボサボサに乱れている。気さくでひょうきんな男だが、自分だけの世界に次第に入り込んではまた出てくるといったことを、繰り返しているのは確かだ。ぼうっとしてしまって話が尻切れトンボになることもあれば、眠ってしまうことさえある。だが乗っているときには、ウィットも交えつつ一度に何分間も漫然と話し続けることができる。昔のことわざにもあるように、猫をしつけようとしても無理なのだ。「昔からシャイでさ」と、クレイグは言う。「おとなしい子だった。喋り出したのが……んと、去年になってからだし」

ひょっとすると、あくまでも仮定の話だが、彼の振る舞いは、凄まじい量のマリファナを吸うことと関係があるのかもしれない。何しろクレイグは、自分用の水パイプをビニール袋に入れて一日中持ち歩いているのだ。そして絶えずパイプに葉を詰め、火をつけ、ズルズル音を立てながら吸引しているのである。礼儀知らずにも、目の前の働き者のジャーナリストに一服も勧めようともせずに。クレイグと2人きりでいると、3歳の自分の甥の子守をしているような気分になってくる。頭を何かにぶつけたりしないように、用心に用心を重ねて彼を見守っている自分が、そこにいるからだ。

変人という評判が先行しているのは、クレイグも承知している。「気にしてないよ。誰かに普通じゃないと言われたところで、別に困ることもないし。そもそも普通って何なの、っていう。単にめちゃくちゃ疲れてたり、食べてないだけってこともあるのに、みんなに誤解されちゃうんだ」。ヴァインズは2002年の夏以前は、あまりツアー活動を行っていなかったため、クレイグは未だに人前で演奏するのに慣れることができない。「ステージを降りるときって、宇宙船に乗り込むような感じがする」と、彼は目を閉じながら語る。「すっかりぶっ飛んじゃってる感じ。存在そのものが消耗し切ってるっていうのかな、ほら、五感のすべてがさ。ヘヴィだよ。ステージを降りるときって、凄くもうろうとしててワケわかんなくなってるんだ。いい気分だよ。だけど演奏直後じゃなくても、もうろうとしてワケわかんない状態なのには変わりないんだけど」

クレイグは、父親がソニー・ミュージックの会計士をしているシドニーで育った。60年代、クレイグの父親はヴァインズ（VYNES）というオーストラリアのガレージ・ロック・バンドのメンバーだった。「そこから名前をパクったんだよ」と、床の上で大の字になったクレイグが言う。「エルヴィスみたいな音のバンドだったと思う」。クレイグに初めてギター・コードを教えたのも、父親だった。そのとき、新しい世界への扉が開かれたのだった。「僕は一匹狼だったって、言っていいと思う。車の運転もできなかったし、だから人付き合いがまったくなかったんだ。一日中家で音楽を聴いてたね。音楽が、僕にとっての神秘の世界になったんだ」

10年生を終了後、クレイグは学校を中退し、アート・スクールも半年でドロップアウトして、マクドナルドで働き始めた。「とんでもない怠け者だったんだ。あそこで働いたのも単に……例の名前を言えないブツを買う金が欲しかったからだし」と彼は言い、テーブル中に散らばった緑色の葉っぱのカスに目をやる。ハンバーガーを焼く一方で、クレイグと職場の同僚のパトリックは、音楽、特にニルヴァーナ、ベック、それにペイヴメントといったアメリカのロック・バンドの大ファンという共通項によって、親交を深めた。2人がバンドを始めるのは時間の問題だった。クレイグが曲を書くようになった後、バンドは地元のスタジオを借りてデモ・テープ

pic by CHRIS FLOYD／CAMERA PRESS／Orion Press

を作った。「2日かかった。それから数百ドルとね。ヘッドフォンでテープを聴き返したとき、僕はマクドナルドを辞めたんだ」

「次のアルバムは100倍いいよ」と、クレイグは宣言し、大好きなこの話題について、熱を入れて話し始める。「明日にでもまたスタジオに行って、もう1枚凄いアルバムを作ることだってできる。トラックを数え切れないくらい作りたいんだ——ヴァイオリンもチェロも何もかも使ってね。今巷じゃ、いい音楽がホントにたくさん出てきてるけど、僕らもその一部になれて嬉しいよ。ストロークスやホワイト・ストライプスなんかと一緒にね。でも、ムーヴメントっていうふうには捉えてないんだ。単に本物のロック・ミュージックだってことで」。一瞬沈黙があり、脳の神経細胞に再び火がつく。「音楽っていうのは癒しの手段、瞑想の手段だと僕は思いたいんだ」

　音楽が持つこのような力、精神に変化をもたらし人生を肯定してくれる力というのは、クレイグにとって重要なテーマとなっている。ところが音楽以外の世界と向かい合うと、彼はパニックに陥ってしまうのである。まるで、音楽との結びつきがあまりにも濃いために、残りの世界とは断絶しなければならないかのように。あの甘く、無感情で、眠そうな笑みの裏側では、ロックンロールの白昼夢の中で甘やかされた美しい子供が、自分の頭の中にある音に聴き入っているのである。音楽のほかには、彼は世の中への好奇心というのをあまり持ち合わせていない。ツアー・バスの中ではよくテレビを観ているが、観終わった後は内容もあまり覚えていない。トニー・ホークのヴィデオ・ゲームはよくやる。昔犬を飼っていたせいもあって、『スクービー・ドゥー』(※TVアニメ)のシャギーと自分を重ね合わせている。感動した映画を思い出そうと、無言でじっくりと考えた末、デヴィッド・スペード主演のコメディ映画『JOE DIRT』を挙げる。大の読書家というわけでもない。政治にもまったく興味がない。彼が心から気にかけていること、唯一心から気にかけていることといえば、ロック・スターになることだけである。

僕はクレイグの世話役なんだ。やっぱ大変な仕事ではある。クレイグってイカレてるから——パトリック

　ロード・クルーの1人が、ヴァレーの自宅でツアー終了祝賀バーベキュー・パーティを開いている。デヴィッド・ボウイの『アラジン・セイン』が鳴り響く裏庭でグリルの周りに群がりながら、ヴァインズのメンバーたちは、実際のオーストラリア人はバーベキューのことを〝バービー〟と言ったりはしない、と指摘する。「エビだって〝シュリンプ〟とは呼ばないしね」と、ヘイミッシュは言う。「僕らは〝プローン〟って呼んでるもの」。パトリックは、自ら考案したテキーラのビール割りを飲んでいる。雄牛でさえ吐き気を催しそうな組み合わせだ。ペイヴメントのギタリストのスコット・カンバーグにそっくりだとわたしが告げると、パトリックはがっかりした顔をする。「スティーヴ・マルクマスって言ってくれると思ってたのに」と、彼は言う。

　パトリックは、このバンド唯一の普通人であり、クレイグと彼が作り出す狂気の間で盾になっているナイス・ガイ、という評判だ。真面目な男で、ヴァインズのために医学大学院入学を諦めた元ドクター志望のパトリックは、今でもツアー中に医学書を読んでいる。「初めてあいつに会ったとき」と、パトリックはクレイグについて語る。「『へえ〜、凄く音楽のできる奴だな』と思ったよ」。でも?「『でも』は後になるまで出てこなかった。ショウをやったり、ツアーをやったりするようになるまでね。そのときになって初めて、『うーん、1年間一緒に過ごす相手だったら、ほかにもっとマシな性格のがいたかも』って思い始めたんだ」

　『ハイリー・イヴォルヴド』のレコーディング作業は、きわめて波乱に満ちたものだった。オリジナル・メンバーのパトリック、クレイグ、そしてドラマーのデヴィッド・オリフの3人は、ベックやエリオット・スミスやフー・ファイターズを手がけたこともあるプロデューサーのロブ・シュナップとレコーディングを行うため、2001年7月にロサンゼルスに飛んだ。2ヶ月にわたるひっきりなしの衝突の末、オリフがオーストラリアに1人で戻ってしまった。「クレイグもデイヴも、2人とも冗談抜きでパニクッてたよ」とパトリック。「どっちとも話ができるのは、僕1人だけだった。でもその後ヘイミッシュがバンドに入って、少し安定したんだ」。同じオーストラリア出身でカート・コバーン似の24歳のライアンは、後からギタリストとして加わった。「僕はクレイグの世話役なんだ」と、パトリックは言う。「すごい忍耐が要る仕事だけど、でも大変ってわけじゃないよ」。パトリックは一息つき、ビアグラスの縁についた塩をちょっとなめる。「っていうか、やっぱ大変な仕事ではある。クレイグって頭がイカレてるから。でもめちゃくちゃ刺激を与えてくれる奴ではあるよ」

　話の中でクレイグは、「真剣に」という言葉をよく使う。また、インタヴューのたびに「僕はロック・スターになりたいんじゃない。アーティストになりたいんだ」というセリフを繰り返す。最初私生活について何度か訊ねても、彼のほうはただ愛想よくニコニコ笑って自分の殻の中に戻り、バンドがどれほど真剣かボソボソ呟くだけだ。が、ドリュー・バリモアがバンドの打ち上げパーティを開くという噂について訊かれ(結局噂止まりだった)、むっとしたのをきっかけに少し打ち解けて話し出す。「あの娘、ストロークスのメンバーと付き合ってんだろ? ドリューから連絡は来なかったよ。じゃあまあまた次の機会に、って感じ」

　恋人はいるのだろうか? 「思うに僕って、長いこと集中できないタチなんだよね。確かにツアー中は、大勢の女の子と出会う。実際、周りに人が大勢いすぎて、何がどうなってるのかもよくわかんないくらいで。クリーニングした服を受け取るのを、覚えとくだけでも一苦労だよ。あと財布をホテルに忘れないようにするとか。恋。キツ過ぎるね。だから僕は音楽を聴くだけでいいんだ」

　故郷シドニーの友人たちは、彼の成功をどう思っているのだろう? 「たぶん、マリファナを吸い過ぎだって思ってるんじゃない」。彼自身は、吸い過ぎかもと心配にはならないのだろうか? 「マリファナはインスピレーション源なんだ。僕にはためになるってこと。集中力が増すし。ある種精神的なものっていうか……。何の話してたんだっけ。あ、マリファナか。僕は吸いながら車に乗ったりはしないけど、でもそもそも車を運転しないからね」

　アルバムの中で彼は愛についてよく歌っているが、今までに恋をしたことはあるのだろうか?「と思うよ。1日に30回は恋に落ちてるんじゃないかな。あるいはもっとか。よくわかんないけど。でもそう、今も絶対に恋してる。トニー・ホークを愛してるもの。コカ・コーラも愛してるし。愛って害悪なのかもな。悪い薬、それが僕には必要なんだ。でも、結婚するかと訊かれると、わかんないね。ナタリー・インブルーリアとなら結婚してもいいけど、僕のほうが忙し過ぎるし、彼女だってそうだし、それに僕のこと嫌ってるだろうし。ホワイト・ストライプスのメグ・ホワイトと結婚してもいいけど、僕なんて相手にしてくれないだろう。あとウィノナ・ライダーとなら結婚してもいいけど、彼女には僕は退屈過ぎるに決まってるしね。僕が誰かも知らないだろうし、彼女の注意を引き続ける自信もないよ」

「今は恋人はいないけど、でもそもそもそんな暇もないしね。今の僕には女の子も近寄ってこないと思うよ。何週間もシャワー浴びてないから。そこんとこはどうにかしなきゃな。女って、体をちゃんと洗う男を尊敬するものだから」

　ツアー最後のショウを前に、ヴァインズはレインボウで急いで夕食をとる。ガンズ&ローゼズの〝ノヴェンバー・レイン〟のヴィデオに登場した店だ、というわたしの言葉を聞いて、立寄ることにしたのだ。クレイグは「フェットチーネ・アルフレード」をオーダーする。恐らくその名前を繰り返し声に出して言うのが、楽しいからだろう。だがほとんど食事には手をつけず、途中で不意に立ち上がって姿を消してしまう。誰も気にする様子はない。この後バック・ステージに姿を現した彼は、誰かが置いていったフランスのロック雑誌をぱらぱらとめくる。「フランス語の話なんて読めないよ」と、彼は不平を言う。「難し過ぎる」。ローディの1人が部屋に入ってきて、クレイグの水パイプをチェックする。「マジで水を替えなきゃ」と、ローディが言う。「誰かにやらせよう」。クレイグはトイレへのそのそと歩いて行き、自分で水を入れ替える。

　パドル・オブ・マッドのウェス・スキャントリンが昨夜バック・ステージに入ろうとしたが、自分が何者か警備にいくら説明しても信じてもらえなかったという噂で、今夜の楽屋は大いに盛り上がっている。「じゃ、パドル・オブ・マッドを怒らせたってわけだな。あいつ、フレッド・ダーストにもチクるんじゃない」と、パトリック。「プレイボーイ・マンションへの招待はなしだ」と、ヘイミッシュが図に乗り始める。「えっと、ライアンにはミス4月、パトリックにはミス12月がお似合いだな。あっ、クレイグ? お前にはミス3月から11月まで全部やるよ」。クレイグは聞いてはいない。ショウの時間だからだ。ほんの数分前までソファで眠っていたのに、もう出入り口で跳びはねている。「さあ」と、彼は言う。「行こうぜ!」

　ライヴ終了後、バック・ステージは幸福感に満ちている。「今夜のドラム・キット壊しは上出来!」と、ヘイミッシュ。仰々しく挨拶すると、ライアンは1ドル札を丸めて水パイプの中に押し込み、火をつける。彼とパトリックが、燃えるキャッシュを交互にふかす。だが人だかりができ始めると、クレイグはソファの一番隅で、再び体を丸めて縮こまる。メンバーの気を引こうと画策する女の子たちから、身を隠しているのだ。室内にいるどの女性もみな、いろいろなやり方で、彼にモーションをかけようとする。1人は彼の肩に両手を置き、目をじっと見つめ、自作の詩を朗読する。彼は何も言わず、彼女が行ってしまうまでただうつろな笑みを浮かべる。ゴルフ・ボールほどの瞳をしたブロンドのウクライナ人モデルが、手に持ったバナナにサインして欲しいと、メンバーたちに頼んで回っている。風変わりな目立ちたがり屋やロック界のやり手や取り巻き連中の世界的メッカ、ここロサンゼルスでは、楽屋も活気でざわめいている。だが目下クレイグは部屋の隅で縮こまり、いびつな笑顔の後ろでひたすら隠れ続けている。頭の中で鳴り響く音楽に耳を傾けながら。